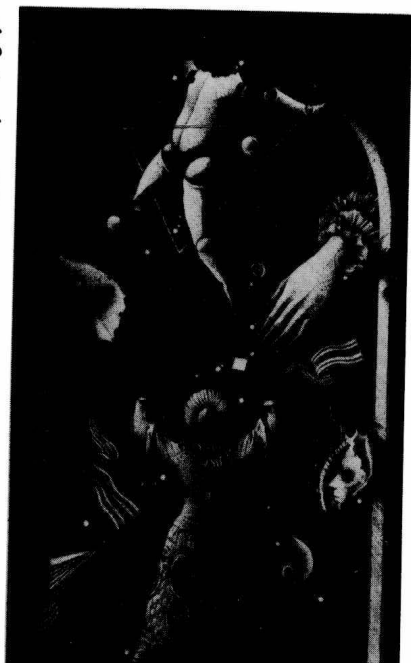


赤江瀑



野ざらしし百鬼行

野ざらし百鬼行



赤江瀑

赤江 瀑（あかえ・ばく）

1933（昭和8）年下関に生まれる。日本大学演劇科卒。70年「ニジンスキーの手」で第15回小説現代新人賞を受賞。73年「罪喰い」、75年『金環食の影飾り』で直木賞候補となる。74年『オイディプスの刃』で第1回角川小説賞を受賞。著書に『猷林寺妖変』『美神たちの黄泉』『ポセイドン変幻』『鬼恋童』『熱帯雨林の客』『正倉院の矢』『蝶の骨』『青帝の銚』などがある。

野ざらし百鬼行^{ひゃつきぎこう}

昭和五十二年七月二十日 第一刷

定価 九八〇円

著者 赤江 瀑

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話（〇三）二六五・二二二一

印刷 凸版印刷

製本所 中島製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

野ざらし百鬼行／目次

悪魔好き

5

劇画を描く少年考

31

永仁五年三月の刀

67

冬のジャガー

85

月曜日の朝やってくる

125

悪魔恋祓い

145

光悦殺し

171

野ざらし百鬼行

195

野ざらし百鬼行

装画 坂東壮一
A・D 坂田政則

悪魔好き

魔がさすという言葉がある。悪魔が、心に入りこむことだ。

入りこむとは、どういうことか、僕にもわからないのである。わからないところが、魔なのである。わかっているならば、魔がさすなどは、いいはしない。すべて、知らぬ間にことが運んでいく。自分でも気がつかないで、ついやってしまっている。いや、ほんとうはやらされてしまうのだが、まあ、ここところが、入った側の魔にしてみれば、悪魔たる面目とでもいえようか。

さて、前口上は、これでよい。

僕はいま、『僕』という一人称代名詞を便宜上使ったけれど、これはべつに『僕』でなくてもよいのである。

『私』でも、『おれ』でも、『わたくし』でも、『あたし』でも、つまりなんだっていいわけだ。第一人称、自称代名詞でさえあれば。

なぜこんな愚にもつかない断わりごとを、最初にやっておくかというのと、つまりこれが第二の前口上となるのであるが、僕はじつは、誰であるか、正体を明かすことができないのである。こうして話しはじめたからには、誰であるかということとは理解してもらおうとは思っているが、話

のどこに登場するやら、それは話さない筈だから（いや、話さないのではなくて、これは話せないのである）、勝手に探してもらうしかない。

ただ、登場することだけは確実だから、さしあたってこの『僕』という代名詞を、使わせてもらうのである。つまり僕が、僕のことを話すときでも、僕は決してそれらしい表現を使ったりはしないから、そのことを最初に断わっておきたかったのだ。

だから、この『僕』という男性自称代名詞には、深い意味などないのである。ただ僕は、一人称自称代名詞のなかでは、わりかしこのコトバが好きだから、便宜上、使わせてもらっているだけである。いわばこれは、僕の好みの問題だ。

そのへんの事情を一言、前口上にしておきたい。
さて、二の枕も、これですんだ。

好みという話がいま出たから、まずこの好みの話から口火を切るのも悪くはあるまい。

好みといえば、ほら、あの温室わきの水道口で、美人の女性と話している（いや、彼女を美人といえるかどうか、これも好みの問題だが、まあ十人並みではあるだろう）、あの少年を見ていただきたい。

年齢は確か十二歳。身長一メートル四十センチ。ちょっと小柄で、風采ふうさいもさしてパツとはしないけど、あの上下つづいた泥まみれの小型ナツバ服みたいな身なりが、じつは彼の好みであって、体裁ていざいだけ見てるぶんには、どこの腕白坊主かとおどろくほどの汚しようだが、あれで無口で、特別彼はおとなしい少年なのである。あの服装にしたってダ、あんなに汚す必要はないのだけれど、あの泥どろこまみれが、好きなのだ。あれを着ているとき彼は、すこぶる機嫌がよいのである。

その証拠に、聞こえない？ あんなに彼はふだんは喋しゃべったりしない子なのだ。

「まあ、ハルオちゃん、それじゃあ悪いわ」

「いいよ。どれでも好きなの、持っていったら」

「ほんとに、もらっていいかしら。わたしね、前から欲しいなって、思ってたのよ。お玄関にびつたりでしょ？」

「そう。これはもともと、そういうふうに変更された花だからね。室内装飾。ウィンドウボックス。テラスの花壇。びつたしだよ。どのハイドラランジアにする？」

「あら、そういう名前なの？ わたし、アジサイかと思ったわ」

「アジサイだよ。西洋アジサイは、普通、そんなによふんだよ。ハナアジサイとか、ハイドラランジアとかね。ヨーロッパや、アメリカで、さかんに抑制栽培されてる、改良種だよ」

「まあ、詳しいわね、ハルオちゃん」

「子供をからかったりしないでよ。さあ、どれにする？」

「あの真っ赤なもの、きれいだわね」

「ああ。フランビュール。ドイツの輸入品種だよ。背丈がちょっと高いのが難点だよな。四十センチはいつてるだろ？ ハイドラランジアはね、矮性花だから、やっぱり背は低くなきゃ。あいつ、どうしてものびちゃうんだよな」

「まあ、そうなの。でも、あの……ワイセイカって？」

「ああ。背丈の低い性質の花ってこと。それ以上のびないように、わざわざ背の低い性質をつくりあげたんだから。鉢植え用にね」

「へえ。そうなの」

「同じ赤なら、あっちにしたら？ あれは、極矮性の逸品だよ」

「まあ、ほんと。あら、見事だわねえ。こんなに小っちゃな木に、こんな大きな花が咲くのォ？
花のほうが大きいじゃない」

「そう。二十センチはあるだろうね、その花玉の直径は。花つき、分枝は抜群だし、繁殖力きわめて旺盛。促成用の鉢植えには、まず最高だろうな。アルペングリュエーエンて、いうんだ」

「あら、それ、この花の名前？」

「そう、品種名だよ」

もうおわかりではあろうけれど、このハルオという少年は、花作りが好みなのだ。

ついでに、そばで、しきりに感歎の声を発している若い女性も、紹介しておく必要がある。

角田京子。二十二歳。この温室の持主の長男の嫁である。つまり、ハルオ少年の義理の姉にあたるわけだ。昨年結婚して、目下お腹に二世がいる。ただし、彼女はまだ知らないが。

彼女の夫の信介は、都心勤めのサラリーマンで、ごく平凡な男である。マージャンで終電車に乗りそびれ、しょっちゅうタクシーで帰ってくる浪費ぐせさえ大目にみれば、まあ格別可もなく不可もないありきたりな男である。もっとも、京子は近頃よく、

「あなたって、怖い。怖い」

と、いうけれど、これはベッドのなかでのこと。まあ彼が人並みには、そっちのほうもおこたりなくつとめているという証左にはなるだろう。それも新婚一年目なら、あたりまえのことではあろうが。

「どう怖いんだ？」と、彼は、いつも聞く。

「わからなくなっちゃう」と、彼女は答える。

「それが、どうして怖いんだ」

「はじめてだもの。こんなになるの」

信介は、そこで満足する。はじめてだということとは、どういふことなのかとは追求しない。ほかにくらべるものがあつたから、はじめてだとわかるのか、くらべるものがなかつたからそれがはじめてとわかるのか、そこらへんの問題にはいっこうに無頓着だ。いふほうもいふほうだが、いわれるほうもいわれるほうだ。まあ似合ひといえは似合ひだろうし、要するに、その程度の夫婦である。彼等は、角田家の離れに住んでいる。

信介の父親は、つまりハルオ少年の父親でもあるのだが、角田信太郎。この近辺では大きなほうのこの農家の当主である。六十歳を越しているから、二人の息子はかなり晩生おくての産である。連れ合ひは、つまり息子達の母親は、昨年死んだ。

相当耕地があつたから、息子夫婦に家業を手伝ってもらいたがつてゐるのだが、二人にはてんでその気がない。と、いうより、嫁の京子がサラリーマン好きなのだ。つまり、農家嫌いなのだ。街からやってきたのだから、まあ一概に非難はできないけれど。

「あらア。赤もいいけど、あの白いのも素敵ねえ。まるで雪の玉みたい。真っ白じゃない。立派だわ」

「あれは、イマキュラーダ。新種だよ。あいつも大型のボールになるからね。純白種の王様どころだな」

「ほんと。真っ白いボールか、手鞠てまりみたいね」

「あれがいいかもしれないな。青や赤だと、pHの加減で色が微妙に変っちゃうからな」

「あら、そのピーエッチつての、なあに？」

「水素イオン濃度さ。ペーハーともいうだろ。溶液中の水素イオンの濃度をあらわす単位だよ」

「へえ。凄いのね、あなたって。もの凄く科学的ね」

ほら、やったのが見えなかった？ とたんに、興奮めしたみたいに小鼻をビクビク。あれが、この少年のくせである。かなり彼女は、軽蔑けいべつされたようである。

「でも、そんなにハイドランジアって、面倒な花？ わたし、面倒見よくないから、もしかして、枯らしちゃったりしたら悪いわ。やっぱりここに置いといてもらって、ときどき眺めにやってくるわ」

ほら、また小鼻をビクビクだ。

「これ、温室花じゃないから、平気だよ。ただ、花芽が寒さに弱いから、アジサイみたいにはいかないけど。越冬方法さえまちがわなきゃ、丈夫なもんさ」

「だって、色変りするんでしょ？、せっかくハルオちゃん素晴らしい色出してくれてるのに、わたしが台無しにしちゃあ、申しわけないわ」

「pHっていったのはね、つまり土壌の問題なのさ。土のなかの酸度や肥料の関係でさ、アジサイは色を変えるんだよ。土壌の酸度が強いとき、青色が勝っちゃうし、酸性度がうすいとき、桃色がかってきっちゃうんだ。日本の土壌は酸性だから、まあ、そのへんの注意が栽培には必要だけど、僕がちゃんとしちゃってるから、大丈夫だよ。赤系統の花には、pHちよつと高くして、中性土壌ないし弱アルカリ。紫系は、pH5から6の間が、最も美しい色を出すんだ」

「あら、ますますわからなくなっちゃうわ」

「僕がやってあげるから、いいよ。赤いのだったら、石灰でときどき中和してやればいいだけだから」

「わたし、自信がなくなつたわ」

ハルオの鼻がまたピクピク。

「つまりさ、アジサイってのはさ、色が変わるようになってきてるんだ。アジサイの七変化^{セツ}って、いうだろ？ あれはさ、アジサイの細胞の中にね、アルミニウムと鉄分が含まれてるからなんだ。この成分が、土の酸度や肥料によって、色の変化を起こすのさ。まあ、こんなことは、わからなくたっていいんだけどさ、面倒なら、白にしたら？ 白は、酸度に関係ないから」

「そう。じゃ、そうしようかしら。それにするわ」

京子は、大輪の純白玉が三つひらいたイマキュラーダの鉢をかかえて帰っていく。ほら、ハルオ少年が、また小鼻をすぼめている。

そう、彼は、この京子という義姉を、あんまり尊敬はしていないみたいである。けれども、あれで、結構いい気分ではいるのである。彼がつくったハイドラランジアを、とにかく義姉は、「まあ」とか「あらァ」とか「へえ」とかをさかんに連発して、觀賞してくれたのだから。

こういうときに、彼のいちばんご機嫌のいいときなのだ。しかし、これは、じつは一年前のこと。

僕の話は、この純白のハイドラランジアを京子がハルオにもらった日から、そう、一年とちょっとばかり後のできごとなのである。

せっかくこの日、二人は仲よくなれそうだと、おたがいに思ったのに。世の中というものは、うまくいかないものである。

2

その日、ハルオは、温室の中だから多少早く咲きすぎたハイドラランジアを一鉢もって、離れの

京子の家をたずねた。

ハルオの部屋とこの離れは、くつつくように建っていて、窓をあけると顔つきあわせて話せるほどのくつつきようだが、ハルオはたいいてい、学校にいる時間を除けば、日中はほとんど温室に入りびたっている少年だから、窓越しに離れの京子と話す機会はめったにない。京子が温室でもたずねない限り、二人が顔をあわせることは、ごくごくまれだったのである。

母屋のほうの食べごとは、ハルオの祖母が賄^{まか}っていたし、兄夫婦はたてまえとして別所帯の形をとっていたから、それもふしぎではなかったが、ここ三ヶ月ばかりは、ことにその疎遠^{そゑん}がはなはだしく、ひどいときには一月近く一度も出会わさなかつたりした。

原因は京子のほうにある。彼女に、二世が生まれたからだ。(彼女はその子を、妊娠中から、「わたしの二世」というふうと呼んだ)このところ、その二世にかかりつきりで、母屋のほうへはろくに顔も出さなかつた。

ハルオはその日、そんなわけで、今年咲いた一番花をとどけてやりに出向いたのだ。

離れは洗濯機の音だけが聞こえていて、ほかはひっそりと静かであった。眼のさめている間は、泣きつめる赤ン坊だったから、眠っているのだなど、彼は思った。声をかけても返事がないので、あがってみることにした。買物にでも出かけたのか、赤ン坊は、一人でふとんに眠っていた。

いや、一人だというのは、正確な表現ではない。赤ン坊の上に、犬が一匹乗っかっていた。

ハルオが飼っている日本犬だった。

飼っていることにちがいはないが、ハルオは目下ハイドランジアに夢中だったから、餌なんかも祖母や父親まかせの状態で、近頃はとんと見向いてもやらなかつた。「ラン」という名の、おとなしい犬だった。